

令和4年度  
総合研究センター  
未来創生研究部門

1：事業

－ 1 寺院／僧侶と現代社会

・ ボランティア活動（支援活動）

－ 岩手県宮古市、大槌町の活動報告

目的) 上記、当該活動を通じ、宗門における災害対策と、縮小する行政サービスのハブとしての寺院の公益性を調査。またソーシャルキャピタル（防災分野）としての地域寺院の役割を構築する方途を含め現地調査を実施する。

曹洞宗は、「誰ひとり取り残さない」、「持続可能な社会の実現にむけて」という SDGs の理念に共感していることから、当該活動は誰一人取り残さない社会実現の一助となることを期待し、実施するものである。

※新型コロナウイルスの流行状況や現地受け入れ先の状態を注視しながら、支援および調査活動を慎重に進めることにする。

◆活動日時

11月30日（水）～12月2日（金）

◆人員

久保田永俊（常任研究員）  
長岡 俊成（青森県第8教区119番・大安寺）  
海野 朋孝（岩手県第1教区5番・久昌寺）  
井上 雅友（岩手県第1教区20番・大泉院）  
穂積 崇祥（岩手県第2教区43番・中興寺）

◆スケジュール

11月30日（水） いわてNPO災害支援ネットワーク 代表事務局 訪問



東日本大震災以降の支援活動から現在にいたるまでの活動取材および、災害対応の連携した活動ができるかどうか、情報共有などに関して、打ち合わせを実施した。

今回の会合の中で、災害発災前から日常的に連携しておかなければ、発災時に連携しようと

しても連絡や会合が行えず、どのような人が中心になって動き、どのようなかたが関わっているのかが見えないと、調整先や受け入れ先も把握しにくいいため連携しづらい。そのため、些細なことでも情報共有ができるよう、定期的に行われる災害関連の会合に参加を試みることから始めることにする。

12月 1日(木) 午前 活動場所：常安寺保育園 訪問



午後 活動場所：吉祥寺 訪問



## 12月 1日（木）の所感

### 訪問先：常安寺保育園

東日本大震災以降、定期的な訪問を続けている。今回の対象は、年長組7名。

年々、出生率の低下、町の人口が減少し続ける中で、保育理念に仏教を背景とした保育園利用者のニーズが一定数あると、中嶋敏孝園長よりお聴きした。両親が共働きのため、実子とのふれあう時間が少なく、子どものところに寄り添う時間がほとんどないのではないかとの話もあった。過疎地であるが故に、保育士の確保が難しい現状が続いている。コロナ禍で、とくに大打撃を受けているのが、漁業および水産加工業に従事する保護者の生活が不漁続きのため、困窮していることが町全体の共通課題としてあるという。

園長先生の要望としては、子どもたちが落ち着かない子も多く、坐禅など、短時間でも良いので、こころの教育を今後もして欲しいという、要望をいただいている。

### 訪問先：吉祥寺

大槌町に支援活動で入ったのは、2回目になる。吉祥寺は吉里吉里地区で唯一の寺院で初めての訪問になる。高橋英悟宗議会議員がご住職である。コロナ禍で寺院の行事が停滞し、なにか行動したくても踏み切れなかったという。今回の私たちの訪問に合わせて、コロナ禍で檀家が集まったのは、初めてだという。大槌町の現在の様子について、ビーズプレスレット作りを通じて、住民の皆さんからお話を伺った。大震災以降、檀家はそれぞれ仮設住宅などに移動をよぎなくされ、ご近所付き合いというのが減った。しかし開山堂は、位牌が地区の昔の集落ごとに仲良く配してある安らぎの空間だった。震災犠牲者の人生を本にする官民協働プロジェクト「生きた証（あかし）」という亡くなられた方がたの人生を記した書籍には、実行委員長として尽力し、協力を洩る遺族にも説得を試みたという。

寺院では、「慈愛サポートセンター」が設立されている。コミュニティー維持から「終活」まで、寺を拠点に住民同士で助け合う合同会社である。「このままでは地域社会が成り立たなくなる」と、高橋住職は住民が相互に必要な支援を行う組織を思い立った。コロナ禍で帰省できなくなった人から、「代わりに墓参りや掃除をしてほしい」との依頼が寺に10件近くあった。高齢者世帯も、里帰りできない息子や娘の顔を見られない状況に不安感が増し、「やはり必要だ」との声が強まったという。

会社は吉祥寺を拠点に、日頃は寺の施設管理をしながら様々な相談ごとを受け付け、遺言書の書き方の指導やパソコンのパスワード管理など、終活関連の支援をしている。

寺では会員になった人には、葬儀や役場への手続き、その後の供養、相続に関する相談、遺品の整理などをワンストップでサポートしている。利益が目的ではないので、料金は安くできるという。住民が気軽に寺に集まれるように、境内にカフェも開く計画だという。スタッフはすべて地元住民。代表社員の芳賀衛氏は吉祥寺護持会長で、

元葬祭会社員と寺の管理をしていた 30～40 代の 2 人が正社員、事務はパート社員 1 人が担っている。行政書士の資格を持つ役員もいる。持続可能なサポートを実現するため、地域内でお金を回し、子育て世代の雇用も確保することをめざしているという。電話は 24 時間 365 日受け付ける。高橋住職は「寺としての活動には限界もあり、地域にセーフティネットが必要だと感じていた。困った時は、どんなささいなことでも相談してほしい」と話している。

こうした寺院で地域を焦点においた事業を立ち上げるという内容は、過疎地に位置する寺院の事業モデルケースとしても、広く紹介したい。

## 12 月 2 日（金）午前 活動場所：宮古保育園



## 12 月 2 日（金）の所感

社会福祉法人 三宝会 宮古保育園への訪問は、コロナウィルス感染拡大が続いてから訪問は途切れていたが、3年ぶりの訪問となる。今回の対象は、年長組9名。

こちらの保育園児たちの保護者は主に、宮古市商店街に居住されるかが多く、自営業の保護者も多い。コロナ禍で観光産業に大打撃を受け、特に飲食店を営む保護者もいたが、閉店したところもあるという。その中でも、コロナ禍で保育園行事が滞ることも多く、今年は何とか行事を開催できているという。こちらの中村吉徳園長先生によると、子どもたちのこころの教育のため、保育園での行事を通じて、家庭の中へ子どもたちが教わった仏教を持ち帰って、それが保護者に伝わるような教化をしてほしいという要望をいただいている。

## ●各所から聴いた曹洞宗に期待する思いを以下に記す（各所訪問の総括として）

東日本大震災以降、遠方の地へ長く関わり続けていただき、感謝をしている。まもなく 13 回忌という時間は区切りの良い時間として、世間では受けとめられているが、当地で暮らすものとしては、まだ 12 年であって、もっと先を見ないといけない状況にある。

曹洞宗の皆さんには、「この先も、隣にいてくれる存在でいて欲しいと思う。隣にいれば、話しかけて下さり、いつも見ていてくれているという安心感がある」宮古市や大槌町、山

田町は残念ながら、内陸の盛岡市から非常に遠いところに立地している。コロナ禍とはいえ、ひき続き、訪問をしていただき、園児たちや住民の心に生涯残る和尚さんたちとして、その姿を行動とともに伝えて欲しいと思う。

こうした様ざまに寄せられる思いに対して、長期的な視点で関わり続けたいと考えている。